表情と音声による高次感情表現に対する印象判断

社会的文脈に応じた視聴覚感情表現の検討

○高木幸子¹・田中章浩¹

(¹東京女子大学)

キーワード: 視聴覚感情表現, 社会的文脈, 主観的印象

Subjective Impressions for Faces and Voices Expressing the Complex Emotions

Sachiko TAKAGI¹ and Akihiro TANAKA¹

(¹Tokyo Woman's Christian University)

Key Words: Audiovisual expression, Social context, Subjective impression

目 的

コミュニケーション場面では、表情や音声の違いや場の状況に応じて、発したセリフは同じであっても不快に受け取られたり、快に受け取られたりすることがある。我々は、場の状況を踏まえて、他者の表情や音声に対する印象を判断している。先行研究によって、表情と音声の示す感情情報は相互に影響しあって、最終的な感情が判断されることが示唆されている (Tanaka et al., 2010)。こうした研究では、喜びと悲しみ、喜びと怒りといった快/不快が明確な感情対に焦点を当て、それぞれの感情を示す表情と音声を組み合わせた実験をおこなってきた。しかし、日常場面では快/不快が明確な感情表現ばかりを判断するわけではなく、嫉妬や尊敬といった高次で複雑な感情の表現をも判断している。また、表情研究では、表情が明確にある感情を示していたとしても、我々はさらに社会的文脈と呼ばれる場の状況を踏まえて感情を読み取ることが示唆されている (Carroll & Russell, 1996)。

本研究では、ある社会的文脈において、同じセリフにもかかわらずポジティブな高次感情とネガティブな高次感情を表現した視聴覚感情表現を用いた実験をおこない、表情と音声による高次感情情報の相互作用が、受け手に最終的に与える印象に及ぼす影響を検討した。

方 法

実験参加者: 大学生 20 名 (平均年齢: 20.85 歳, $SD = 0.73$) が実験に参加した。

刺激: 実験に先立ち、女性モデル 10 名による視聴覚感情表現を収録した。同じ文脈かつ同じセリフでも、表現方法によって快/不快の区分が明確に異なるケースと、曖昧なケースをそれぞれ 2 つずつ設定し、演技してもらった。表 1 には、快/不快の区分ごとのセリフと、モデルが演技の際に想定した 2 種類の感情をまとめた。演技の際には、表情と音声の両方に各感情を込めてもらった。それぞれのモデルの演技は、3 名の評価者によって発話音圧と感情表現を基準に選定され、最終的には 10 名中 8 名のモデル (平均年齢 20.9 歳, $SD = 0.94$) の演技を刺激とした。さらに、編集加工によって表情と音声の感情価が一致しない組み合わせを作成した。

表 1. 刺激の快/不快の区分ごとのセリフおよび感情

区分	セリフ	感情 1	感情 2
明確	それで	興味	退屈
	すごいね	尊敬	嫉妬
曖昧	なんでもない	否定	不安
	ありがとう	歓喜	礼儀

手続き: 実験では、参加者にセリフごとに文脈に関する説明を与えた。参加者は視聴覚感情表現 (感情価が一致/不一致) を観察し、文脈を考慮したうえで、もしその感情表現が自分に向けられたものだった場合 (1) 快もしくは不快にどの程度感じるか、(2) 相手が自分に抱いている好意度はどの程度だと感じるか、を 6 件法で回答した (AV 条件)。続いて、すべての感情表現を顔のみ (V 条件)、声のみ (A 条件) で観察し、同様の 2 つの問いに回答した。

結 果 と 考 察

第一に、セリフごとに、V 条件と A 条件における快/不快度と好意度の評定値の感情間での差を、t 検定によって検討した。V 条件では、いずれのセリフにおいても、感情間で快/不快度および好意度の評定値に差はみられなかった。一方、A 条件では、すべてのセリフにおいて、感情間で快/不快度および好意度の評定値に差がみられた。どちらの指標においても、感情 2 よりも感情 1 における評定の平均値が高かった。この結果は、高次感情表現に対する印象判断では、表情よりも音声の方が影響を与える可能性が高いことを示唆している。特に日本人は感情判断の際に音声の影響を強く受けることが明らかになっており (Tanaka et al., 2010)、高次感情の判断ではその傾向がより強く反映されたと考えられる。

第二に、AV 条件について、表情 (2: 感情 1, 感情 2) × 音声 (2: 感情 1, 感情 2) の分散分析をセリフごとにおこなった。従属変数は快/不快度および好意度の評定値であった。分散分析の結果、すべてのセリフにおいて表情と音声の主効果が有意 ($p < .05$) であり、感情 2 よりも感情 1 の場合に、快度と好意度が高く評定されることが示唆された。高次感情の表現については、表情のみでは印象判断に影響を与えないものの、音声と同時に提示されていれば表情も影響を与えると考えられる。

また、セリフをプールし、快/不快の区分ごとに分散分析を実施したところ、曖昧なケースの好意度評定でのみ、表情 × 音声の交互作用がみられた ($F(1, 19) = 6.85, p < .05$)。結果を図 1 に示す。快/不快の区分が曖昧な場合には、表情が感情 1 と感情 2 のどちらを示しているようにと、感情 1 の音声と同時にされた場合の方が好意度の平均が高かった。感情 1 と感情 2 では、快/不快の区分は曖昧であるものの、感情 1 の方が覚醒度が高いと想定される。ゆえに、高次感情表現が受け手に与える印象は、表情と音声の示す感情の覚醒度の組み合わせによって異なる可能性が示唆された。

図 1. 快/不快の区分が曖昧なケースにおける表情と音声の示す感情ごとの好意度の平均値

引用文献

- Carroll, J. M., & Russell, J. A. (1996). Do facial expressions signal specific emotions? Judging emotion from the face in context. *Journal of personality and social psychology*, 70(2), 205.
- Tanaka, A., Koizumi, A., Imai, H., Hiramatsu, S., Hiramoto, E., & de Gelder, B. (2010). I feel your voice: Cultural differences in the multisensory perception of emotion. *Psychological Science*, 21, 1259-1262.